

テレサが指揮官にチョコを渡すだけのお話

野生のムジナは語彙力がない

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バレンタインデー

それは恋人たちの1日であると同時に、普段、なかなか伝えることのできない感謝の気持ちを他者に伝えるための日でもある。

指揮官である貴方、溢れんばかりのカリスマ性と類い稀な戦の才能を駆使して基地を発展させ、今ではスロカイやベカスを始めとする多くの優秀な仲間たちから慕われ、さらには世界最高の武力を持つまでになり、その力は貴方の一声で世界のミリタリーバランスがひっくり返るとまでされている程です。

バレンタインである今日、今年も基地で働くみんなに日頃の感謝を伝えるべく、貴方

は全員分のチョコレートを用意してあげています。朝から忙しく世界を飛び回る貴方の元へ、この日、普段のクールな色を少しだけ滲ませ、ちよつぴり恥ずかしそうにして1人の女性が訪れることになります。

果たして、彼女の想いは無事に指揮官へ届くのか

本編

目次

1

本編

新暦??年

2月14日ーバレンタインー

指揮官が運営する

エリア????
ベース????

ー夜ー

基地 多目的ホール

指揮官（ん、これで一通りチョコは渡せたかな？）

基地で働くスタッフ一人一人に感謝の気持ちを込めて作ったチョコを一通り贈り終えたところで、指揮官は時刻を確認した。いつのまにかすっかり夜も更け、もう間も無く日付が変わろうとしていた。

指揮官（あと渡せてないのは……テレサだけかな？）

ベサニー「お勤めご苦労様です、指揮官様」

も、しかし基地の防空システムは何の反応も示していないことから、即座にその可能性を否定する。

ベサニー「指揮官様!? これは……」

指揮官（見てくる、ベサニーはここにいて!）

混乱した様子のベサニーを落ち着かせてそう告げると、指揮官は自身をブーストさせ滑走路に向かって走った。そして滑走路の中心で、飛行機らしきものが炎上しているのを目撃した。

爆炎に包まれた機体の前に数名の人影が見える。

指揮官（テレサ!? それに光子……!?!）

黒焦げになったそれが誰であるのか認識した瞬間、指揮官は慌てて3人の元へ駆け寄った。

指揮官（み……みんな、これは一体……?）

テレサ「し、指揮官……」

黒焦げになったテレサは指揮官の声に気がつくくと、ゆっくりと立ち上がり、フラフラとした足取りで歩み寄り、懐から取り出したバレンタインチョコの箱を指揮官へと手渡した。

テレサ「こ、これを……」がくっ

指揮官（テレサ!? しっかりして!）
崩れ落ちたテレサの体を抱きしめ、指揮官は絶叫した。

機動戦隊アイアンサーガ

非公式バレンタインイベント

『テレサが指揮官にチョコを渡すだけのお話』

それは遡ること数時間前……

「朝」

指揮官の執務室 兼 自室

テレサ「指揮官、ちよつといいかしら？」

右手に持ったそれを後ろ手に隠し、ノックもそこそこに執務室へと踏み込んだテレサは、部屋の中を見渡して指揮官の姿を探した。

シエロン「んー？ 指揮官デニキならいないよー」

しかし部屋の中にテレサが探していた人物の姿はなく、代わりに青髪の少女……シエロンが指揮官用の椅子に座って、書類が山積みになったデスクを前に何やら忙しそうに手を動かしていた。仕事をしているのかと思いきや、その手に握られているのはペンではなく携帯ゲーム機であった。

テレサ「そう、いないのね……」

シエロン「指揮官に何か用ー？」

テレサ「いえ、なんでもないわ」

シエロン「あー、もしかしてバレンタイン？」

テレサ「……！」

ゲームの片手間に発したシエロンの何気ないひとことに、立ち去ろうとする直前でテレサは小さく息を呑んだ。

テレサ「……なぜ、分かったの？」

シエロン「え？ だってほら……今日バレンタインだし、指揮官のところに来るんだつたら大体これ関連かなくて」

テレサ「……………」

シエロンの言葉に、テレサは観念したように目を閉じた。そして、これ以上隠し続けなくても無駄だと判断したのか後ろ手に忍ばせていたバレンタインチョコの包みをゆつくりと正面に出した。

シエロン「うん、まあそーだと思ってた。いやー、指揮官も隅にはおけないねー、ひゅーひゅー」

テレサ「そうじゃない。バレンタインは……日頃なかなか伝えられない感謝の気持ちを伝えるという意味もあると聞いたから。そう、指揮官にはいつもお世話になっているから……うん」

シエロン「そつかー。まあ、とりあえず指揮官はしばらく戻ってこないと思うから、適当にそこに置いてたらいんじゃないの？」

テレサ「そうさせてもらおうわ」

そう言つてデスクの上にチョコを置いておこうとしたテレサだったが、その直前であ
ることに気がつきピタリと動きを止めた。彼女の視線の先には自分以外の誰かが送つ
たチョコがいくつか置かれている。デスクを埋め尽くす書類の山で、今の今まで隠れて
見えなかったのだ。

テレサ「……………」

シエロン「ん、どつたの？」

テレサ「いや、やっぱりやめておくわ。これは指揮官に直接渡すべきだと思う。私の
気持ちも、ちゃんと伝えておきたいから……」

シエロン「ん、まあいいんじゃないの？」

テレサ「ところで指揮官はどこに？」

シエロン「多分、司令部の方だと思うよー」

テレサ「司令部ね」

シエロン「そうそう。でも急いだ方がいいかもだよ？ だってこの後、指揮官は
……………つていないし、まあいつか」

指揮官の行き先を聞き出したテレサは、シエロンの言葉を最後まで聞くことなくその
まま部屋から退出してしまった。1人部屋に残されることとなつたシエロンは手元の
ゲーム機から目を離して半開きになつたドアにチラリと目をやり、それから軽く肩をす

くめてみせると、気を取り直してまたゲーム機へ視線を落とすのだった。

それから約10分後……

シエロン「よつしや！ ラージャン討伐完了、あはつ、鎧袖一触とはまさにこのこと……つてね！」

感無量といった調子でゲームを遊び終えたシエロンは、ゲーム機をデスクの上に置いてため息を吐くと、大きく背伸びをして気持ち良さそうな呻き声を上げた。

シエロン「あ~~~~つつかれたあ~~~~！ うーん、やるべきことはやったし昼寝ならぬ朝寝しよつと。あ……でも自分の部屋まで戻るのめんどいから、このまま指揮官のベッド使わせてもらおうとしますかねえ」

まるで机の上に溜まった書類の山など目に入っていないかのように呟き、シエロンは椅子から立ち上がると、そのまま寝室まで行こうとして……

バァン!!!

シエロン「うえええ!? 何事!?!」

テレサ「……………」

部屋の自動ドアが勢いよく開かれた音に、シエロンは思わずびくりとなった。そして顔に暗い表情を浮かべたテレサが、再び指揮官の部屋へと姿を現す。

シエロン「え、ど……ど……どったの!？」

テレサ「……………」

シエロン「あー……その様子だと、指揮官と会えなかつたって感じ？」

シエロンの言葉に、テレサは力なく頷いた。

テレサ「私が司令部に着いた時には、指揮官の乗った機体は離陸した後だった。今日
は用事で朝から世界各地を回らないといけないからって、だから………指揮官、今日
はもう帰ってこないかもしれないって、スタツフたちが言ってた」

シエロン「あー、それは惜しかったねえ……んじゃあ、それ机の上に置いてけば？」

テレサ「やだ。それじゃ負ける」

シエロン「負けるって何に……ああ、これね」

2人はデスクの上に視線を送った。

スタツフたちから送られてきた沢山の個性豊かなバレンティンチョコの中に混じって、とりわけ異彩を放っているものが1つだけあった。しかも、どういうわけかそれは認識しづらく物体の周囲の空間が歪曲しているように見えた。

辛うじて見える差出人のところには『睦月より愛を込めて』と書いてあるのが見える。恐らく、彼女が真心を込めて作ったその（狂氣的な）愛情の重さと深さ故に、脳が認識するのを拒んでいるのだろう……テレサは心の中で冷静にそう分析した。

テレサ「あんなのと一緒に並べられたら一貫の終わり、というかこつちまで呪われかねない。それに私の想いも上手く伝わらないと思う、だから指揮官に手渡ししたい。出来れば……今日中に」

シエロン「んじゃあ、指揮官のこと追いかける？」

テレサ「そのつもり、けど……移動手段がない」

シエロン「だったら丁度いいしアレ使えばいいじゃん。ん……なんだっけあれ、マンタみたいな形した飛行機っぽいやつ」

テレサ『『エアウルフ』のこと？』

シエロン「そうそれ」

『エアウルフ』とは

指揮官がテレサの為に用意したディアストーカーの空戦用追加兵装である。ディアストーカーにこれを装備することにより、高い狙撃能力を維持したまま高高度戦闘能力を発揮することができる。

テレサ「私もそれは考えた。でも駄目、指揮官が行動を共にしているのは機動部隊イ
ブシロンだから、偵察爆撃機の『エアウルフ』じゃ到底追いつけない」

シエロン「『ファストトラベル』か」

機動部隊イブシロン『ファストトラベル』

指揮官が創設した全24ある多種多様な専門部隊の中でも、特に足の速さを誇る部隊
である。主に突発的に生じた事案への初期対応、他機動部隊との艦隊行動時における一
番槍などといった役割を担っている。

シエロン「別に非常事態って訳じゃないだろうけど、1日で世界各地を巡るってなる
と、そりゃあ足の遅いタンカーよりもジェット機を選ぶよねー。で、どうやって指揮官
にチヨコを渡すよ?」

テレサ「それは……」

??? 「ふっふっふ! 話は聞かせて貰ったわ!」

テレサ「誰？」

突如として聞こえてきたその声にテレサが振り返ると、入口の自動ドアがスライドする気配……しかし先程のことが影響してか、開閉機構の故障により自動ドアは3分の1程しか開かなかつた。

???「え、ちゃんと開いてくれないんだけど、何これ壊れてる!!? あーもう、こうなつたら力づくで……ぐぬぬぬ……!」

自動ドアをこじ開け、その人物が姿を現した。

青ツインテ、やたらヒラヒラとした服装……

テレサ「えっと、誰だっけ？ 貴女」

シエロン「あー、誰かと思つたらセラステイアじゃん」

セラステイア「はあ……はあ………やつと開いた、コホン。それでは改めまして、天才セラステイア様の登場よ！」

貧弱な少女……セラステイアは息を乱しつつも、そう言つて決めポーズを取つてみせた。

セラステイア「話は聞かせて貰つたわ！ 足の速い機体をご所望？ それなら良いのがあるわよ、私について来て！」

テレサ「盗み聞き？ タチが悪いわね」

セラスティア「うっさい！ いいから来なさい！」

ー朝ー

格納庫

セラスティア「さあ、とくどご覧あれ！ これこそ世界最高の天才と名高いこのセラスティア様が開発した超高機動型B M！ 開発コード『スピードスター』よ！」

セラスティアに案内されるまま格納庫を訪れたテレサとシエロンは、航空機用のハンガーに収納された飛行機と対面することとなった。先鋭的でスマートなフォルムのそれは、飛行機と呼ぶよりも宇宙船と呼ぶに相応しい近未来的な外見をしていた。

テレサ「B M？ 飛行機じゃなくて？」

セラスティア「何を隠そう、これ可変機なのよ」

テレサ「可変機？ 飛行機からB Mになれるってこと？ ん、確か極東軍も似たようなものを作っていたような気が……まさかパクった？」

セラスティア「失礼ね！ もともとトラ○スフォーマーは合衆国の文化なんだから！

ス○スクもウイ○グゼロも！ どっちかというところパクリはあっちの方なんだから！」

シエロン「ウイ○グガ○ダムは日ノ丸製」

テレサ「とにかく、これに乗って行って言うのね？ 見返りは何？」

セラスティア「特にないわよ？ でもまあ、強いて言うならこれの実戦データを帰ってくただけでいいわ。殺人的な加速力を持つてるから並の人間には乗りこなせないけど、まあアンタなら大丈夫でしょ？ これなら『ファストトラベル』だろうと余裕で追いつけるはずだわ」

テレサ「今、サラツと恐ろしいことを言われたような気がするけど、まあいいわ。ありがたく使わせて貰うわね」

そのまま、3人はコックピットまで移動した。

テレサ「複座なのね？」

セラスティア「流石に、慣熟飛行もなしにぶつつけ本番でいきなり動かせとは言わないわよ。この機体のテストパイロットを紹介するわね」

??? 「んー、呼んだー？」

セラスティアの声に応えるようにして、薄暗い格納庫の奥から1人の少女が姿を現し

た。

テレサ「……貴女がテストパイロット？」

アカネ「新条アカネです、よろしく」

赤紫色の髪の少女は軽い調子でそう告げた。

いかにも一般市民というような小柄で学生服姿の彼女は、とてもこういったものに乗れるような素質も適性も有しているようには見えなかつた。

シエロン「え？　なんでいんの？　ここアイサガだよ？」

アカネ「メタ発言w　細かいことは気にしな～い」

セラスティア「なんか暇そうにしてたから仕事を手伝って貰ってたのよね。もちろん指揮官の許可は取ってあるわ！　かくかくしかじかというわけだから、アカネはテレサのことを指揮官のところまで送ってあげてね」

アカネ「おうけえええい！」

アカネは微笑まじげな様子でサムズアップしてみせると、対Gスーツを着ることもなくテレサと共に『スピードスター』へ乗り込み、機体を滑走路へとタキシング……そのままアフターバーナーを吹かして基地から飛び立つのだった。

セラスティア「さて、邪魔者も消えたことだし……はいこれ、私からのプレゼントつてことで指揮官に渡しといてね」

そう言つてセラステイアは、今まで隠し持っていたバレンタインチョコの入った箱をシエロンに預けた。無理やり手の中に押し込まれる形となつたシエロンは怪訝そうな表情を浮かべる。

シエロン「えー？　なんであたしが？　めんどくさ……自分で渡しなよー、指揮官的にもその方が嬉しいだろうしさー」

セラステイア「そ、そんなの無理よ……だつて、は……恥ずかしすぎるじゃない！　指揮官に正面から想いを伝えるなんて……あつ……勘違いしないでよね！　べっ

……別に！　あいつのことなんて何とも思つてないんだからっ！」／／／
シエロン「あー……ツンデレ乙」

ー昼ー

ライン連邦

スノー「なるほど、指揮官様を追つて基地から……ですか。はあ……それは遠路はるばるご苦労様でございました」

指揮官の後を追ってライン連邦へと飛んだテレサは、女性だけで構成された特殊部隊・通称『紺碧少女』の詰所へと辿り着いていた。

スノー「な、何もありませんが……ごゆるりと」

テレサ「長居はしないわ。指揮官はどこ？」

スノー「えつと、それなのですが……」

レイラ「んー？ 指揮官ならもういないよ」

怖い顔でテレサに詰め寄られ、スノーがどう受け答えしていいものかと困惑した表情を浮かべていると、そこへ偶然通りかかった紺碧少女の隊長ことレイラが、大体の事情を察してそう答えた。

テレサ「……いない？」

レイラ「うん。指揮官なら、夜に演る予定のガスナとハイジのバレンティンライブのリハーサルに付き合った後、ウチの子たち全員にチョコ渡してすぐに次の所に行ったよ？」

テレサ「……！ 指揮官はどこに向かった？」

レイラ「うーん、確か機械教廷に行くって言ってたような……もつとゆつくりしてもいいのね。あ、そうそう！ バレンティンチョコなら私も貰ったんだ。いいでしょ♪ でも指揮官も大変だよなー、普段お世話になってるからって毎年チョコ作ってみんな

に配ろうとするなんて……めんどくさくてとても真似できたものじゃないよー」

スノー「あの、隊長……」

レイラ「うん？ どうしたのスノー」

スノー「テレサさん、もう行きましましたけど」

レイラ「おや？ おお本当だ」

そこでようやくテレサがいなくなっていることに気づくと、レイラは「流石スナイパー、逃げ足が速いねー！」と感心したような表情を浮かべ、ポケットから貰ったチョコを取り出した。

スノー「それと隊長、他の紺碧少女のメンバーもグレッタ以外全員、指揮官へお返ししたんですから。隊長もめんどくさがらずに、今度会った時にはちゃんとお返ししてあげて下さいね」

レイラ「分かってるよ。うん、美味し〜♡」

—————

アカネ「あ、お帰り、指揮官いたー？」

テレサ「いや、いなかった。機械教廷に向かって」

アカネ「はいはい」

???『その飛行機！ 動かないで！』

アカネ「ん？ 飛行機って？」

テレサ「……どうやら私たちのことみたいね」

発進準備中のスピードスターの中で2人が辺りを見回すと、全天周囲モニターの隅で、青いランプを点灯させた車輛数台がこちらに向かってきているのが見えた。しかも、その近くにはライオットガンを装備したBMもいる。

テレサ「警察か……」

アカネ「へー、ドイツの警察って青いんだー」

テレサ「動かないで、少し様子を見ましょう」

アカネ「いいけど、完全に囲まれちゃったねー」

ゾーイ『貴方たち、ここは飛行禁止区域です。今すぐ両手を上げて機体から姿を現しなさい！』

数台の車輛とBMがテレサたちを取り囲む中、一台の警察車輛がスピードスターの正面へと回り込み、手にしたメガホンを使ってそう呼びかけてきた。パイロットはバイエルン市警の1人であり、指揮官とも親交のある女性警察官　ゾーイだった。

アカネ「あちゃあ、ここ飛行禁止区域だったのかー。どうするよ、このまま大人しくお縄につく？」

テレサ「そういうわけにはいかない。私はなんとしても、今日中にこれを指揮官に渡さなくちゃいけないから……」

アカネ「だよねー。で、どうするよ？　周りには武装したケーサツだらけ、加速しうにも進路は塞がってるし、無理に飛び立とうとしたら撃つてくるよねー？」

テレサ「私に考えがある。コントロールを頂戴」

—————

ゾーイ『出てこないなら力づくで……えっ!？』

その瞬間、ゾーイを始めとする警察官たちは自分の目を疑った。なぜなら、今まで飛行機だと思っていたそれが形を変え、一瞬のうちにスマートなシルエットの人型機へと姿を変えたからだ。

ゾーイ『に、逃げるつもり!? 全車両攻撃……うわっ!?!』

ゾーイは慌てて鎮圧行動に移ろうとするも、それよりも早く人型機形態のスピードスターから警察官たちに向けて複数の火の玉が放たれた。それはミサイルに対処するための防衛兵装であり、威力などないに等しかったのだが、なんの前触れもなく放たれたそれは警察官たちを怯ませるだけの効果はあった。

テレサ「それでは、失礼するわね」

スピードスターを操り、混乱に乗じてゾーイの隣をすり抜けつつテレサはそう呟いた。

テレサ「この機体、武装はないのね」

アカネ「試作機みたいだからねー。まあ武器がない分軽くなってるんだから、逃げて逃げて逃げまくろー♪」

テレサはモニターに表示されたスピードスターの操作マニュアルを確認しつつBMM用の強化道路で機体を滑走、ある程度のスピードが出たことを確認すると背部スラスターとウイングを展開、アフターバーナーによる加速を得たところで機体を跳躍させた。

ゾーイ『ま、待ちなさい! スピード違反の容疑も追加しますよ!』

ゾーイが後を追おうとした時には既に遅く……

強化道路から飛び出したスピードスターがバイエルンの空を舞う。テレサはマニキュアルに従って機体を空中で飛行機に変形させると、そのまま操縦桿を引いて上昇した。機械教廷の方面に向かってあつという間に遠ざかっていく機影を、ゾーイたち警察官は呆然と見送ることしかできなかつた。

アカネ「すごいすごい！ こんな短時間で機体の操縦方法を身につけちゃうんだ。へー、やっぱり本業の人は違うねえー、もうあたし必要ないじゃーん」

テレサ「それはどうも」
アカネの褒め言葉に淡々と返事をしつつ、テレサは機体をさらに加速させた。

それから少し経つた後……

ー地中海上空ー

テレサ「見えた！ 『ファストトラベル』！」

アカネ「え？ どこどこ？」

テレサの高い視力が、海面スレスレを飛行するファストトラベルの空襲駆逐艦エアレイドデストロイヤーシップを

『ARDー5』を捉えた。スピードスターより遥かに巨大な船体はステルスシステムにより偽装されているのだが、スピードスターに搭載された視覚フィルターがそれを看破し、その姿をモニターに表示した。

テレサ「こちら元スカレット所属のテレサ」

テレサはレーザー無線で空襲駆逐艦へ交信を図る。

テレサ「テレサよりARDー5へ、そちらに乗艦している指揮官とお会いしたい。着艦を要求する」

ARDー5『……IFF確認。こちらARDー5、オペレーターの橘です。貴方……な、なんなんですか！ いきなり出てきたかと思えば要求して!?!』

テレサ「これより着艦する」

ARDー5『ま、待つてください！ 指揮官はこの船にはいません！ 我々とは別の用事があると言って、指揮官はつい先ほど本艦の高速哨戒機に乗って出て行かれました』

テレサ「……え？」

オペレーターの言葉にテレサは愕然となった。

テレサ「指揮官はどこに……?」

ARDー5『大陸を横断して日ノ丸へ向かわれたかと。あの……もしかして緊急事態

ですか？ よろしければ着艦を許可しますけど』

テレサ「いい。このまま指揮官を追……」

アカネ「あ、お願いします。あと、ついでに補給したいです。いやー、もう機体の推進剤とバッテリーの残量がなかったからヤバくてww、このままだと2人まとめて海の藻屑になるところだったから助かるよー」

テレサ「くっ……やっと思いついたと思っただのに」

ー夕方ー

日ノ丸・A・C・E・学園

光子「佐伯殿！」

佐伯「ああ、佐々木さんか」

茜色に染まった教室。

掃除当番の佐伯が自前のモップを使って床の掃除行っていると、そこへ光子が息を切らした様子で駆け込んできた。

光子「佐伯殿、指揮官殿は何処におられる？ この場所に来てしていると聞いたのだが……」

佐伯「ああ、それならもう基地に帰ったぞ。あっちもアンタのことを探しているみたいだったが、どこにいるか分からないって言ったら、これを渡しておいてくれ……」
そう言つて佐伯は、指揮官から預かつていたバレンタインチョコを光子に投げ渡した。しかし、それをキャッチした光子の表情はどこか浮かない様子だった。

佐伯「全く……インターンシップで基地に来ている全員にチョコを渡すから集まれて事前に連絡があつたはずだろ？ 忙しいはずの高橋兄妹や風紀委員さんだつてちゃんと来てたんだぞ、連絡もなしに今までどこに行つてたんだ？」

光子「その……拙者、連絡を受けるまで今日がバレンタインだということを失念してしまつていて……」

佐伯「あー……それで慌ててチョコレート用意して遅れちまつたつてことか、まーよくある話か」

光子の手には買ったばかりのバレンタインチョコの箱が握られていた。それを見て佐伯は肩をすくめてみせると、ポケットから取り出したチョコレートを一粒だけ口に含んだ。

佐伯「おつ、美味しいなこれ。アンタも食えよ……というか、そんな気にすんなよ。感

謝の気持ちを伝えるのは必ずしも今日である必要はねえだろ」

光子「しかし、せっかくの指揮官殿のお心遣いに対してお返しする事も出来ず、ちゃんとお礼も言えてませんし……拙者にこれを食べる権利はありませぬ」

佐伯「ハツ……相変わらずアンタ真面目だねえ、オレはホワイトデー辺りでお返しできればそれでいいと思ってるし、そうするつもりなんだけどな」

テレサ「そう……またなのね」

佐伯「ぶっ……!?!? あ、アンタどこから!?!」

いつからそこにいたのだろうか?

いつのまにか自分の背後に佇んでいたテレサの存在に気づいた佐伯は驚きのあまり、口に含んでいたチョコレートをあわや丸ごと飲み込みかけた。

テレサ「普通に、教室の扉からだけど」

佐伯「いや、それもあるが……オレが言いてーのはそーいうことじゃなくてだな、どーみても不法侵入じゃねえか、セキュリティどうなつてんだこの学園……」

アカネ「セキュリティ? あー、寄つてきたハエみたいなのは全部、普通に叩き落としてきたけどー?」

佐伯「ハエつて……え? 誰お前……?」

アカネ「細かいことは気にしなーいw」

佐伯の横を通って、テレサは光子へと近寄る。

光子「貴女は……テレサ殿？」

テレサ「貴方もチョコレートを？」

光子「え……それではテレサ殿も指揮官殿に？」

テレサ「うん……でも、ちよつと難しい」

テレサたちの乗ってきたスピードスターだったが、ここに至るまでの間にかなり損傷してしまっていた。尺の都合上カットしていたのだが、領空侵犯で何度も対戦闘機ミサイルに追われるハメになり、防空網を避けるために超低空で溪谷を駆け抜けてはニアミスしかけ、禍々しい北境の怪物たちの攻撃を無理なマニューバで回避するなりして酷使しすぎた影響で、機体性能が大幅にダウンしていた。

テレサ「だから、力を貸して欲しい」

光子「えつと……しかし、拙者にできることなんて」

テレサ「そんなことはない。貴方には、貴方にしかできないことがある……お互い、指揮官を想う気持ちは同じな筈、だからこそ協力しましょう」

光子「拙者にしかできない……？ テレサ殿、それは一体？」

テレサ「これを……」

そう言つてテレサは光子の手に何かを握らせた。

光子「これは……?」

テレサ『『怒火コア』(SPアップ)よ』

光子「……………」

アカネ「まだあるよー、はいこれ」

光子「これは、びゃ……『白虎紋』? (SPアップ)」

テレサ「……………引き受けてくれるかしら?」

光子「……ああ、そういう」

そして、物語は冒頭に至る……

光子「巖流・燕の閃きイイイイイイ!!!」

アカネ「わく速い速ーい!グリッドマンよりもw」

テレサ「見えた! 基地の明かりよ……!」

光子のスキル、巖流・燕の閃きを用いて機体を爆発的に加速させ、無事、3人は日付が変わる直前に基地へと辿り着くことができた。しかし、ここに来てついにスピードス

ターも限界を迎えたのか基地を目前に控えたところでバランスを崩し、錐揉み状態で基地へとハードランディング……もとい墜落した。

光子「み、みんな……無事ですか……っ!?」

アカネ「あはは、何で生きてんだろ？」

テレサ「な、何とか……ね」

炎上するスピードスターの残骸から何とか這い出た3人は、お互いの生存報告をしつつ、そして体力の限界を感じてぐったりと滑走路に倒れた。

指揮官（み……みんな、これは一体……?）

テレサ「し、指揮官……」

黒焦げになったテレサは指揮官の声に気がつく、ゆっくりと立ち上がり、フラフラとした足取りで歩み寄り、懐から取り出したバレンタインチョコの箱を指揮官へと手渡した。

テレサ「こ、これを……」がくっ

指揮官（テレサ!? しっかりして!）

崩れ落ちたテレサの体を抱きしめ、指揮官は絶叫した。

| | | | |

かくして、テレサは日付が変わるギリギリのところ、指揮官へバレンタインチョコを贈ることに成功し、彼女の壮絶なバレンタインは幕を閉じるのだった。

この一件で、指揮官は負傷した3人を心配するのだが、テレサはもちろんのこと、光子は指揮官にちゃんとお礼の言葉を伝えられ、さらにお返しのチョコを渡せてスツキリとした表情を浮かべ、テレサに付き合っていた新条アカネもまた、リアルな世界でも経験することのできないエキサイティングな出来事だったと、ご機嫌な様子で今日一日を振り返るのだった。

おわり